

特集 試される宗教リテラシー

対談 デジタル時代のメディアで 宗教をどう視せるか

渡邊直樹¹・西出勇志²

司会 平藤喜久子³

2023年8月2日実施（於 國學院大學）

「メディア」の単数形である「ミディアム」が中世には巫女や霊媒者を指す言葉だったことが象徴するように、メディアと宗教のあいだには切っても切り離せない関係がある。情報メディアだけでも、新聞や雑誌といった報道の分野、映画や小説・漫画といった文化の分野において、宗教は様々な形で取り扱われてきた。

今回の対談では、大正大学の『地域人』前編集長で、『宗教と現代がわかる本』をはじめ数々の雑誌・書籍を編集してきた渡邊直樹氏と、共同通信社編集委員・論説委員で、稀少な「宗教記者」の立場から取材を続けてきた西出勇志氏に、メディアにおける宗教への関わりとリテラシーについて、オウム真理教事件や東日本大震災といった転換期を振り返りながら、将来への展望を語っていただいた。



¹ わたなべなおき：大正大学客員教授、大正大学出版会編集長

² にしでたけし：共同通信社編集委員・論説委員

³ ひらふじきくこ：國學院大學神道文化学部教授

世代文化としての宗教

平藤 統一教会問題をきっかけとして、宗教リテラシーという言葉が注目されるようになりました。宗教についての知識を得て適切に運用する能力が必要だということで、最近の文脈では「カルトとそうじゃない宗教を見極める」とか「変な宗教に入らないために宗教リテラシーが必要だ」といったような文脈で使われることも多いかと思います。もちろん、宗教についての知識の運用というのはそれだけではなく、ビジネスや観光などの色々な分野で求められています。

今回の鼎談で注目したいのは、メディアという分野での宗教リテラシーです。私たちは様々なメディアを通して、宗教についての知識や情報を得ていますし、それによって宗教についてのイメージを作り上げています。メディアと宗教の関係は人類史的にすごく古く、聖書や寺社縁起のように、宗教の歴史はメディアの歴史だと言っていいと思います。とはいえ今回の鼎談は『現代宗教』なので、そこまで古くまでは遡らずにここ数十年を切り取って、新聞や雑誌といった報道の分野と、映画・小説やポップカルチャーといった文化の分野について議論しましょう¹⁾。

最初の分岐点として、1995年があります。1995年は阪神淡路大震災やオウム真理教の地下鉄サリン事件があり、社会が大きく変化するときでしたが、それだけではなく、Windows 95が発売されてインターネットが一般化する一つの契機になったという意味でも非常に重要な時代だと思います。もう一つがやはり東日本大震災で、日本社会を根本から揺るがし、エネルギーや社会保障・安全保障、生き方も含めて、これでもいいのかということ突きつけました。それが宗教ともすごく関わりがあったということで、どう報じたか、文化メディアにどう関わったかという論点があります。まずは最初の1995年までのところについて、報道の観点から、西出さんにお話をいただければと思います。

西出 共同通信社の西出です。安倍さんの事件から一年、宗教リテラシーという言葉が多くの人々の口の端に上るようになりました。この宗教

リテラシーの向上にマスメディアが寄与する必要がありますが、マスメディア、特に世俗の新聞メディアは、宗教というものに対してあまり関心がなく、取材の蓄積もありません。近代的な新聞は事実に基づく合理主義を尊ぶところがあって、宗教のような、新聞にとって訳が分からないものはなるべく見ないようにする、隠してしまおうとする傾向があります。例えば、インタビューを行った相手が「私は実はこういう宗教を信じているからがんばれるんです」と言っても、そうした信仰の部分は切ってしまい、単にがんばっているという部分だけで物語化してしまうんですね。さらに言えば、メディアが見る宗教はものすごくステレオタイプで、今はさすがにほとんどなくなりましたが、「宗教に走る」というような、負のイメージを雑に強調する表現は、かつては普通に紙面化されていました。宗教・信仰を持つことに対して非常にマイナスのイメージがあります。

負のイメージは、1995年に起きたオウム真理教による地下鉄サリン事件で決定的になりました。メディア報道の効果も相まって宗教のマイナスイメージが増大しました。オウム事件後は「スピリチュアル」が隆盛になるのですが、オウムとの関係を含め、マスメディアはその点をあまり視野に入れていません。オウム事件を経験したマスメディアは、ますます宗教界全体に触れないようにする傾向が強くなったと感じています。

私がお話ししているのは新聞とかテレビの報道メディアが中心ですが、次に渡邊さんがお話しになる本や雑誌といった出版メディアでは、新聞やテレビの風潮に対して異議を唱えるようなものもあり、非常に貴重だったと思っています。

平藤 それでは渡邊さん、いかがでしょうか。

渡邊 大正大学の渡邊です。日本では1945年の敗戦後、公教育やメディア・政治・ビジネスなどの場で宗教に触れたり語ることは、一種のタブーとなってきたといえるでしょう。戦前の“国家神道”体制への大きな反省があり、伝統仏教教団など既存の宗教団体は、「戦争協力」の

過去を総括することから再スタートしました。

いっぽう現実の社会では、敗戦後の混沌とした世の中に「神々のラッシュアワー」といわれるように新たな宗教が次々と生まれ、高度経済成長期には労働力として田舎から都会に移住した人たちの絆をつなぐ新宗教の信者数が拡大し、代表例である創価学会は政治にも進出して公明党が誕生します。

1960年代後半の大学紛争など世界的な広がりを見せた若者の政治の季節が終息しようとする1970～80年代、ちょうど私が大学に入ったころなのですが、アメリカの西海岸のカウンターカルチャーやヒッピームーブメントの動きは日本の若者にも伝わってきました。私が宗教学に進んだのも、そのタイミングでした。とはいえ、多くの日本人は「自分は「無宗教」だ」と考え、宗教についてとくに考えたこともないし、公教育で宗教をとりあげることなどほぼありませんでした。

私自身は、大学卒業後は編集者として複数の出版社で仕事をしてきました。最初に手がけた月刊『太陽』（平凡社）は、国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンの時期とも重なり、仏像や寺院・僧侶・茶道・俳句など、宗教に根差した日本文化を特集することが多いビジュアル教養誌でした。その後に編集長を務めた複数の雑誌は、振り返ってみると、読者層や内容は異なっていましたが、「宗教」に関わる連載や特集はどの雑誌でも企画し記事にしてきました。

その中で、記憶に残るのは、やはり1995年1月の阪神淡路大震災と、3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件です。95年当時は、週刊『SPA!』（扶桑社、1988年～）の次に創刊した月刊誌『PANJA』^{パンジャ}（扶桑社、1994～96年）の編集長でしたが、『SPA!』編集長のときには、フォトジャーナリストの藤田庄市さんが、新宗教の儀礼、それも公開されることの少ない秘儀を取材して写真と文章で伝えるという連載を続け、『霊能の秘儀——人はいかに救われるのか』（扶桑社、1992年）という書籍にまとめました。当時の雑誌メディアが宗教を扱うスタンスは、①スキヤングル（金と女に関わる事件）か、②宗教教団の“提灯記事”が主流でしたが、「霊能の秘儀」は教団や信者の方たちとの微妙な距離感を保

ちながら宗教の核心部分に迫ろうとした、週刊誌としては画期的な内容だったと思います。

西出 『SPA!』では中沢新一さんとオウム真理教の麻原彰晃教祖との対談²⁾に編集長として渡邊さんも立ち会われたんですね。

渡邊 はい、そうです。企画段階から中沢さんと相談しながら進め、私が直接交渉し、対談の場にも立ち合いました。対談は1989年の11月、翌日から麻原一行が海外に行くために滞在していた成田空港に近いホテルの一室で行いました。後になって、坂本弁護士一家は対談の時点ですでにオウム信者たちにより殺害されていたことが判明するのですが、対談に先立ち中沢さんが、「世間では坂本弁護士家族の失踪をめぐり騒がれています、あなたたちは関与していませんか？ もし関与していたら今日の対談は成立しません」と切り出したのに対し、麻原は「いや、そういうことはありません」と答えました。しかし、対談の後半になって「うちにも若い信者もたくさんいますからね」というようなことも言っていました。その発言部分も記事として掲載してあります³⁾。

オウム真理教の犯罪・事件は、宗教学の内部でも大きな問題・課題となりましたが、この記事を企画・掲載した私にとっても、その後の宗教の報道・表現を考え直す大きな転機となりました。戦後の日本が宗教についてきちんと考えたり教育してこなかったことも、やはりこの事件を引き起こす遠因になったと考えました。

それから数年は、別のメディアを手がけながら藤田さんとも話をしたり、自分のできることを時間をかけて考えるなかで、宗教学関係の先生方を中心に様々な分野の学者、ジャーナリスト・宗教家・作家・写真家・マンガ家・アーティストなど多くの方々のご協力をいただき、2007年から2016年まで年に1冊『宗教と現代がわかる本』（平凡社）の責任編集者として計10冊を刊行することができました。一年間に起きた広義の「宗教」に関わるニュースや事件などの背景を一般読者向けに解説する、アカデミズムとジャーナリズムを繋ぐような内容で、宗教に



『宗教と現代がわかる本』の最終号となった2016年号。

関して様々な立場の人が多方面からアプローチしてオープンに論じ合う場を提供したいという意図で発刊したものです⁴⁾。

2023年に大きな問題となった統一教会や宗教と政治の問題に関して、その後のテレビや新聞などのメディアにご登場され発言されてきた島藺進先生・櫻井義秀先生はじめ、塚田穂高さんなど、『宗教と現代がわかる本』でも同様のテーマでご執筆あるいは座談会などで発言していただきました⁵⁾。しかし、それ以降も統一教会と自民党との関係はさらに深くなっていたことが判明すると、『宗教と現代がわかる本』の企画意図とは別に、その社会的影響の非力さに忸怩たる思いがあります。2016年以降も、『宗教と現代がわかる本』が存続していたら今年は何をテーマにしようかと毎年のように考えてはいたのですが。

西出 当時、「オウム世代」という言葉が生まれました。私はこの言葉に該当する世代です。61年生まれで、上祐史浩氏（62年生まれ）など元オウム幹部と年齢が近く、宗教学者では弓山達也さん（63年生まれ）と

いった方が同世代です。あのときにもものすごくしんどかった。心が痛い感じでした。学生時代から高橋巖先生の『神秘学講義』（角川選書、1980年）を読んだり、シャーリー・マクレーンの『アウト・オン・ア・リム』（地湧社、1986年）の世界に関心を持ったりしていて、特に松岡正剛さんが編集長を務めていた『遊』（工作舎、1971～82年）を愛読していました。当時の『遊』は、吉福伸逸さんをはじめとする、C+F研究所の人たち、トランスパーソナル心理学系の人々が多く執筆していました。オウム信者の来歴が報道されると、私に関心を持った行き先の一つがオウムだったと言えるなと思い取材していて、すごく痛みを感じていました。当時、私の原稿を見ていたデスクは今70歳代半ばの世代で、彼女は「あなたの痛みは私の“連赤”と一緒に」と言ったんです。学生運動を経てきた自分たちにとって、連合赤軍事件がものすごくつらくて痛いことだった、こんなことにたどり着くと思わなかったっていうことですよ。

サブカルチャーからのまなざし、 サブカルチャーへのまなざし

平藤 メディアと宗教では、やはり1970年代に五島勉さんの『ノストラダムスの大予言』（祥伝社、1973年）があって、あれは当時のメディアミックスで展開したものでした。『幻魔大戦』（1967年連載開始）も。

渡邊 平井和正さんはたしかGLAの信者でしたね。学生時代に、新宗教を参与観察する柳川啓一先生のゼミで、私と四方田犬彦氏はGLAを選んで、何度か集会にも行きました。後に「幸福の科学」を創設する故・大川隆法もGLAの影響を受けていましたね。

平藤 『幻魔大戦』では前世の観念が重要ですけども、1980年代には『ぼくの地球を守って』（白泉社、1986～94年）という漫画の影響で、自分の前世で出会った人を『ムー』（学研、1979年～）の文通コーナーで探したり、小中学生が前世を見るために薬を飲んで中毒症状を起こして

大問題になったりってということなんかもあったりして。

1995年から井上順孝先生を中心に、國學院大學日本文化研究所と「宗教と社会」学会が一緒に行った「学生宗教意識調査」⁽⁶⁾では、3割～過半数ぐらいが前世を信じていて、割合が高いんですね。けれど、その「前世」という言葉の用例を新聞で調べてみると、戦前はほとんど出てこないですよ。もちろん仏教用語としてはあるけれども、明らかに1970年代～80年代の文化メディアが前世のイメージをポジティブに演出してきた影響が宗教意識に現れているんだろうなと思います。今は『君の名は。』（新海誠監督、2016年）の「前前前世」から君を探したという歌があって、そんなそんな早く往生してくださいと思うんですけど（笑）、来世というのが注目され、ポップに信じられるようになっていきます。異世界転生とかは学生も大好物です。

私は大学の卒業式が地下鉄サリン事件の日で、研究を始めるのはポストオウムなのですが、オウムなんかもやはり前世とか『ムー』とかそういう出版メディアの文脈のなかで育ってきたというところもあると思います。出版メディアにとって、そういったサブカル的な言説に対しての反省点というか、そのあたりはいかがでしょうか。

渡邊 私はポスト団塊の世代ですが、『SPA!』はサブカルに注目した初の週刊誌でした。具体的には、宮崎勤による連続少女誘拐殺人事件（1989年逮捕）のときに他の週刊誌との違いを鮮明にしました。それまでの団塊の世代がつくってきた「おじさん週刊誌」は事件に対して、新聞で言うところと社会部的なとらえ方をしていました。私が意識したのは文化部的な視点です。自分が共感できないものや自分のなかにその要素がないものを「あかの他人が起こしたこと」として取り扱うことはしない、と決めたのです。宮崎勤のときは、まず中森明夫さんと大塚英志さんに対談してもらいました。ビデオがたくさん積まれた宮崎の部屋を見て、これは自分たちが理解不能な他人ではない、自分の中にも宮崎的な要素もありはしないか、というスタンスで記事にしました。もちろん犯人の宮崎を肯定するわけでは全くありません。その後も、連載記事を書いて

いた宅八郎氏（故人）と話して、「『おたく』が世紀末日本を動かす！」という大特集（1990年）を丸ごとまかせました。大部数の雑誌でオタクを初めて肯定的に扱ったのが『SPA!』でした。当時の『SPA!』はかなり尖っていて、「自分たちはマスメディアではないしミニコミでもない。ミディアムメディアだ」と宣言していました。マスメディアから真似されて上等、その逆の企画は提案するな、という心意気でしたから。我々は、まだ目に見えない水面下にある現象や、そこで活動している面白い人たちをいち早く取り上げることを目指していました。オタク文化もいち早く肯定的に扱っていました⁷⁾。余談ですが、4年後に創刊した『PANJA』では「おたくよさらば」という記事をつくりました。新聞・テレビ・電通などが持ちあげはじめていましたからね（笑）。

西出 事件や事故を担当する社会部だけではなく、新聞などのオールドメディアはどうしてもステレオタイプの切り方をしてしまうところがあって、例えば「ロリ系アニメの愛好者は犯罪に走りがちだ」というような偏見があると思うんですね。そこをもうちょっと引いて大きく見ると、実はそれほど単純な話ではないわけです。少し引いて異質な視点を出すメディアが必要で、それはリテラシーの向上につながっていくだろうと私は思います。私もサブカルチャーは嫌いではないので、「サブカル＝犯罪予備軍」みたいな捉え方をされてしまうと、ちょっと違うなという感じが当時からありました。

渡邊 私のつくる雑誌観は報道というよりも文学的な表現に近いのかもしれない。あるいは参与観察的というか。人間を見るときに自分の内部も照らしつつ見ていく。宗教的なものを見るときも信者さんを見るときも、諸手を挙げて賛成ということはないけれど、自分も共感できるころはどこなのかというふうに見ます。とはいえ、今回の統一教会と政治の問題に関しては従来の社会部的な追及をもっと徹底してやらなければいけない。政治家に近すぎる政治部ではなく、社会部や雑誌の頑張り時なんだけど。SNSでは無責任に誰でも何でも言えるけれど、結局そ

れも事件の本質にいたらないで、うやむやのままに続くことに結果として力を貸すことになっています。

メディアの役割としての編集

平藤 1995年にはWindows 95も出て、インターネットが一般化していきました。かつては前世がどうかノストラダムスの大予言がどうか色々あっても、本屋さんに行けば批判も含めて色々なものが非常に可視化された形で並んでいたの、相対化できたと思うんですよね。けれども、それがインターネットになってそのなかで完結しがちになると、メディアの大きな力とか性格が結構捨象されてしまうような。

渡邊 私もWindows 95の頃からインターネットに興味をもち、詳しい人たちに教えてもらうのが一番だと思い、短期間でしたが『週刊アス



渡邊直樹 (わたなべ・なおき)

大正大学客員教授、大正大学出版会編集長。1951年生まれ。東京大学文学部(宗教学専攻)卒業後、平凡社で『太陽』を編集。その後、『SPA!』『婦人公論』『をちこち』(国際交流基金)等の編集長を歴任。2004年～2016年まで大正大学文学部・表現学部教授。『宗教と現代がわかる本』を10年間責任編集。2015年『地域人』創刊、2023年5月まで編集長を務める。

キー』を創刊しました。当時から西和彦さん（アスキー社長）は、「インターネットを使えば現場に行って取材することはない」と言っていました。インターネットは急速に普及し、いまや新聞・出版といった文字中心のメディア企業も、デジタルを導入してIT企業やキャリアと組むなどしないと、従来のビジネスモデルでは企業経営が成り立たなくなってきました。社会全体がすぐに成果や結論を出すことを求めている。その影響はメディアや教育の世界においても大きくなり、問題も見えてきています。

平藤 そうですよ。

地下鉄サリン事件のことを授業で伝えるときに、当時の新聞の一面をデジタル化したものを見せるんです。新聞のいいところは、何が大事なのか、何が起きているのか、事件の衝撃性が写真の使いかたとかでパッと分かるじゃないですか。「社会にとってこれはすごいことなんだよ」「みんなで考えなきゃいけないんだよ」というのを、新聞は紙面の力でバーンと出してた。それが1995年以降、インターネットがメディアの主戦場になっていくなかで失われていったということも大きいんじゃないかなと思うんです。今はヤフーニュースにダーツと並んでいる見出しで、ニュースの軽重が分からない。人によってはTwitter（現X）でバズったニュースが大きなニュースになったりとかして。

西出 おっしゃるとおりです。ただ、まだ新聞はかなりの部数が発行されていますので（一同笑）。

我々は毎日毎日、何が重要ニュースかを巡って会議をやるわけです。共同通信の場合、政治や経済・国際・科学・文化など色々なジャンルを取材した中から、担当のデスクやニュース報道の責任者が重要なニュースを話し合って選び、「これは一面に相当する大きなニュース」というのを配信先の新聞社に知らせます。「何が重要ニュースか」についてはすごく大切に考えている人間が多いので、場合によっては会議で喧嘩になることもあります。例えば「この人が死んだら一面のニュースだよね」

とか「この事態が起きたら号外だよな」みたいなことは常に話し合っているわけです。

報道を仕事にする私たちが、見出しや記事の大小でニュースの価値付けしていたわけですが、今のインターネット社会でニュースは並列的でフラットになっていくわけですよ。そうすると、重要ニュースはページビューなどで決まることになります。しかも何がバズるのかわからない。共同通信もサイトでバラエティーに富んだニュースを出していますが、「えっ？」というようなものが上位に浮上すると、これまでに日々磨き続けてきたはずのニュースセンスの在り方を考えなおさなければいけなくなってきました。フラットに並べられてしまうことによって、「このニュースは絶対に重要」と思っても見向きもされないことが多々ある。ネット読者の関心事と、報道機関が考える社会的なニュースの重要度のバランスをこれからどう折り合いを付けていくか、難しいと思います。

渡邊 出版では書籍の目次をつくる時に起承転結を意識してきました。ビジュアル雑誌の特集たとえば40ページを構成するとき、私はいまでも自分で全ページのラフレイアウト（絵コンテ）を手描きで描いて、ページ全体の流れや写真の山場などを考えないと気がすまないのです。しかし今はまさにフラットの時代。どこからでも読めて短時間に読みきるように文字は少なくという流れです。タイパを考えて必要な情報入手するにはフラットなつくりが向いています。でも、それならば紙である必要はなくデジタルにこそふさわしいものです。リクルートがかつて発行したフリーペーパー『R25』（2004年7月創刊）は、地下鉄の一駅で見開きの記事をひとつ読めることを売り物にしていました。リクルートの情報誌はいち早く紙からウェブに変わりました。教育情報産業は時代の流れを先取りして切り替えが早い。

報道業界における宗教の扱い

平藤 今回の鼎談は宗教とメディアに関わるリテラシーの話ですが、新聞社や雑誌というのは、宗教専門の人がいたりトレーニングしたりということはあるんですか？

西出 一般紙の場合、宗教担当ってほぼいないんですよ。「ほぼ」というのは、会社の担務としては存在せず、自らの関心で取材をする記者が僅かながら存在するという意味です。関西には京都宗教記者会（1948年～）がありますが、全国紙やNHKの場合、大阪や東京の本社へ行く前の通過地点としての、京都らしさが堪能できる、ちょっと変わった一記者クラブという位置付けでしょう。専門紙と一般紙、テレビ局が加盟していて、お祭りや人事・事件に対応しています。私を含め、ここを通過して宗教取材を継続している一般紙の記者はいるにはいますが、本当にごくわずかです。東京本社には、宗教全般を見ている記者はいなくなっただけに等しい。

歴史を振り返れば、読売新聞が100年前、1925（大正14）年に「宗教欄」を先駆けて作りました。読売新聞は、仏教信仰が篤かった正力松太郎さんが社主であり、何人も宗教記者を出しています。仏教学者、増永靈鳳の子息である増永俊一さんは著作『宗教の回廊—記者だから出会えた巨人たち』（春秋社、1992年）も残されていますね。ただ、今は宗教欄はありません。朝日新聞も1979年に読者の声を反映して「こころ」欄を作って初代は外村民彦さんが担当されていましたが、その後に編集長になった菅原伸郎さん⁸⁾の退職を機に、東京本社発行の「こころ」のページは20年ほど前になくなってしまいました。毎日新聞は、菊池寛賞を受賞した「宗教を現代に問う」（1975～76年）の連載など、東京の佐藤健さんや大阪の横山真佳さんといった名物宗教記者がいましたが、どこの社もほぼいなくなったという感じですね⁹⁾。ただ、先ほどもお話しした通り、関西には多少とも宗教を紙面で扱おうという空気があり、今でも熱心な記者が少しはいます。

平藤 1995年のオウム真理教事件のときには、宗教についての知識がそんなにない人たちが事件についての報道を取り扱っていたということでしょうか。

西出 当時は、宗教に関心のある記者が学芸部や文化部といったセクションにまだそこそこいました。でも、事件報道の主流は別のセクションであり、宗教の取り扱いについては全国紙を見ても首をかしげるような報道も散見されました。ただ、現在の統一教会報道に関して言うと、知識が欠けていてひどい記事だなどと思うものはあまりないですね。インターネットの発達で、専門知を持つ研究者へのアクセスを含め、かなり学習できる環境になったからだという気がします。

平藤 櫻井義秀先生みたいな専門家にすぐに訊いてしまうみたいな。

西出 櫻井先生は、取材攻勢で本当に大変だったようですよ。



西出勇志 (にしで・たけし)

共同通信編集委員兼論説委員。1961年生まれ。85年に共同通信に入社、90年代前半の京都支局時代から宗教取材を始め、2011年の東日本大震災後に「こころ」のページを立ち上げ現在も継続中で、宗教取材は30年以上になる。長崎支局長、東京メトロポリタンテレビ (TOKYO MX) 報道部長なども務めた。

渡邊 いま、メディアの中で宗教に関して内容もしっかりしていて、かつ普通の人にもわかりやすい良質の番組を制作しているのはダントツでNHKでしょう。統一教会と政治の問題に際して「クローズアップ現代」に櫻井先生や塚田さんが登場して解説をされたり、「こころの時代」でも島蘭進・釈徹宗・小原克博・若松英輔といった多くの宗教学関係の先生方による座談会シリーズが再放送も含めて放送されました。ほかに、広い意味での宗教に関わる良質かつ面白いドキュメンタリー番組が増えています。

「こころの時代」も従来だと「宗教家の先生のありがたい法話を聞く」というイメージだったのが、最近ではたとえば、「走る哲学者」ともいわれる元陸上スポーツ選手の為末大さんが蓑輪顕量先生と対談したり（為末大『熟達論』にはその対談から学んだことも反映されている）、無罪判決を30件以上確定させた元裁判官の木谷明さんの人生を詳しく紹介したり、番組の枠が広くなり、より多くの人の関心にこたえる丁寧な番組づくりがされています。その底流には広い意味での宗教と関わるものが流れています。

人気番組『ドキュメント72時間』の中の「島根・黄泉平良坂 あの世との境界で」は、そこを訪れる人々の話から、多くの日本人が考える死生観・宗教観がとてもよく伝わってきました。宗教学の教材としてもいい内容でした。

西出 2011年の東日本大震災で報道が本当に変わりました。東北の被災地が神仏の信仰が篤い土地だったことが大きい。地元の寺院に被災者が集まってきて本堂が避難所になっていたり、僧侶や神職、新宗教の人たちが支援に各地から入ったりして、ごく自然な形で地元の方々と触れあっている。それを中央から乗り込んでいったメディアが見て、「宗教の再発見」みたいなものがあったと私は考えています。これまでメディアが遠ざけていた宗教が、現地で受け入れられて活動していることに気づいた。そこから信仰をプラスに捉える方向で、さまざまな報道が出てくるんですね。オウム事件のときに地に堕ちた宗教イメージが、2011

年の東日本大震災でずいぶん変わる。臨床宗教師のような、一教団ではなく超宗派で動く宗教者であれば、マスメディアとしては取り上げやすい。宗教イメージは良くなったと思います。臨床宗教師は、特に関西でよくニュースになっていました。宗教に関しては、専門のページで報じるのではなく、社会面とか家庭面とかで、僧侶や神職が行っている色々な活動が普通に上げられるようになってきたというのが、2011年以降の大きな流れだと思います。

葬儀と宗教者のありかた

平藤 それでいうと島田裕巳さんの『葬式は、要らない』（幻冬舎新書）が出たのが2010年で、宗教色のない葬儀が目ざされたり、特に都市部はそういう傾向があったと思うんですけども、2011年の震災のときのニュース報道ですごく印象的だったのが、葬儀ができない悲しみ、つまり、グリーンケアとして宗教的な儀式が必要なんだということだったり、震災を取り上げた映画の中でも僧侶が遺体安置所でお経をあげている場面があったりした。葬式はいらない、つまり宗教色のある葬式はいらないという、宗教へのネガティブなイメージが共感を得る一方で、震災を機に、そうではない面にメディアも注目して報道したと思いますし、映画もそういうものを取り上げていく。おっしゃるように、出す側も意識してきたということは大きいかもしれない。

渡邊 宗教者の人たちが本来のありかたに目覚めたと言ったら失礼かもしれませんが、被災地に行って現場に直面したときに、自分の宗派を宣伝するのではなくて、宗派を超えて被災者の苦しみに直に向き合い、それに応えようと活動されていましたね。報道する立場の人間にもそれが伝わったのでしょうか。東日本大震災は、その後の対応しだいでは、日本が大転換する機会にもなったはずなのですが……。

西出 石井研士先生は団体性の拒否について指摘されています¹⁰⁾。それ

はまさにそのとおりだと思いますね。教団ではなく、例えば僧侶や神職といった若手を中心とした宗教者たちが、宗派を超えたボランタリーなつながりのなかで、自分たちが宗教者として何をやっていくべきかすごく考えた。今、その活動の流れが色々なところで開いて、成果が出ていますよね。ただ、そこで教団が出てこないということは、それはそれで大きい問題ではあると思いますね。

平藤 映画の話で言うと、例えば伊丹十三さんの『お葬式』（1984年）のなかの僧侶像というの、かなり仏教批判があるじゃないですか。それで『おくりびと』（滝田洋二郎監督）が2008年ですけれども、あれも納棺師の仕事で、宗教ではないですよ。青木新門さんの原作（『納棺夫日記』桂書房、1993年）にも、お坊さんは死者と向き合わないでお金を数えているみたいな表現があったりして、『おくりびと』のなかで、葬儀の中の景色というのはすごく後景化している。一方、震災の後に作



司会・平藤喜久子（ひらふじ・きくこ）

國學院大學神道文化学部教授、日本文化研究所所長。学習院大学大学院人文科学研究科修了。博士（日本語日本文学）。専門は神話学、宗教学。神話の読まれ方、神の描かれ方などを地域や時代に注目して研究している。最近では宗教と写真にも関心を持っている。最近の著書に『〈聖なるもの〉を撮る』（港千尋と共編、山川出版社）、『「神話」の歩き方』（集英社）、『神話でたどる日本の神々』（ちくまプリマー新書）、『世界の神様解剖図鑑』（エクスマレッジ）などがある。

られた『遺体明日への十日間』（君塚良一監督、2013年）という西田敏行さんが主人公の映画では、一人でやってきてお経をあげるお坊さんが出てきた。今の西出さんのお話を聞くと、やはり教団宗教への不信とかそういうものはあって、でもお坊さん個人の振る舞いによって変わってくるということなんですよ。

西出 私、ウェブで漫画をよく読みますけど、葬送業界を取り上げた漫画って結構多い。ただ、総じて、葬送の漫画にお坊さんは重要な役割として出てこないですね。『病室で念仏を唱えないでください』（こやす珠世著、小学館、2012～20年）とか『お慕い申し上げます』（朔ユキ蔵著、集英社、2011～14年）とか、僧侶や神職を取り上げたものはかなりありますが、葬送の漫画になると、葬送業者がいかに遺族と向き合うかが主題です。つまり、グリーフケアを担う主体は葬送業者なんですよ。

平藤 そうですね。私が最近読んだ漫画（はがあおい『葬儀屋さんになったわけ』イースト・プレス、2022年）でも、葬祭会社に就職をした子が遺族とどう向き合うかがテーマになっていたりとか。

西出 ほぼ宗教者不在ですよ。宗教者と葬送業者が協働している様子を描いた漫画はあまり見たことがありません。

渡邊 2011年の東日本大震災のあと、葬儀や宗教者のありかたが見直されましたが、2019年末からの「コロナ禍」でも、葬儀のありかたなどが大きく変わりました。大勢が集まる法要ができなくなり家族葬や直葬が増え、Zoomを使つての法事も行われるようになりました。メディア側の取材方法も、対面での取材インタビューが避けられてオンラインでの取材が増え、コロナ禍以前とは大きく変わりました。

平藤 櫻井先生と一緒に山形の過疎地でお寺のインタビュー調査なんかもしたんですけど、もう本当にそういうことを言っていられない急激

な過疎化というのがあって、お寺さんだけが残ってそれで残ったと言えるのか、という話なんかはよく聞きます。神社なんかもそうですけれども、地方に行けば行くほど複数の神社を兼ねるのが普通になっていて、そういう場所が大事なんだということが再認識される一方で、止まらない部分もあったりしますからね。

アートで宗教を伝える

渡邊 被災地の復興にも貢献し、被災地の人たちの希望ともなり、地域に人々を呼び込むうえでも力となるアートが各地で制作・展示されるようになっていきます。そのなかに、一種の宗教的感覚をもたらす作品が増えていきます。たとえば、大正大学も被災直後から支援活動を続けている宮城県の南三陸では、2023年に「南三陸311メモリアル」という施設ができました。そこで展示されている現代アートのクリスチャン・ボルタンスキーの「MEMORIAL」は、日本では初のボルタンスキーの常設展示でもあります。ボルタンスキーは、人間の生と死、個人の記憶と忘却などをテーマとした作品をつくりつづけてきただけに、震災の記憶を次世代に伝えるための施設にふさわしい作品です。暗い展示室の中に積まれたたくさんの金属製の四角い缶はぼんやりとしか見えない。その部屋の空気のなかにいると、日常では感じられない感覚や何者かが漂っているのを私は感じました。受け止め方は人それぞれでしょうが、視覚が主役ではなくなることで、それ以外の感覚が働き出すのでしょうかね。

もう一つは、2023年6月26日に福島県いわき市の四倉海岸で、「満天の桜が咲く日」という花火を打ち上げるプロジェクトを、世界的なアーティストの蔡國強さんが地元の人との協力を得て実現しました。その前年、私はいわき市を拠点に活動する小松理慶さんから、蔡さんの活動を長年支えてきた志賀忠重さんを紹介してもらい、蔡さんのプランを志賀さんたちが実現した「いわき回廊美術館」を訪れました。「いわき万本桜プロジェクト」は、東日本大震災と原発事故の教訓を後世に伝えようと、桜の木をひとり1本、全部で9万9千本植え続けていくというプロ



いわき万本桜プロジェクトの完成図。「再生の塔」などの施設も描き込まれている。

プロジェクトで、今のペースで行くと300年後に完成するという、ガウディのサグラダファミリアを上回る遠大な計画です。未来の子供達に世界の桜の山を里山で残すということなんですね。今年の「満天の桜が咲く日」では、4万発の花火が、幅400m、高さ120mの天空に30分に渡って打ち上げられました。この模様はYouTubeで見ることができます。この花火自体も素晴らしいのですが、このはらかな先の未来に万本桜プロジェクトが完成して、いわきの地に桜の花が咲くんだという希望の光とエネルギーとなるものになったと思います。各地で地域おこしのための野外のアート展覧会が開催されていますが、もっともその土地の歴史と人々の人生に深く根ざしているのが、いわきのプロジェクトだと感じました。

平藤 そういうアートというの、一つのメディアとして宗教を伝えたり残したりするものですね。

西出 石巻には「いのり大佛」を造るプロジェクトが進行しています。24時間入れる空間に大仏があって、そこではお膝に触れてすがって泣くことができます。東日本大震災で亡くなった方のご遺族、さらに苦しみ

を抱えるあらゆる人に向けて建立するため、現在は勧進が行われています。こういうメディアがあるのはいいことですよ。

平藤 結構色々な神社とかお寺が、新たに伝える手段としてプロジェクションマッピングをやったりアーティストの人に来てもらって作品を作ったりしていくというのは、かつての寺社縁起じゃないですけど、絵解きをやった綺麗な絵を見せるとか有名な彫刻家に作ってもらうとか、そういうようなことと変わらない、一つの文化メディアを使った布教だと思います。先ほどの、組織としての宗教への不信感というのが根強く残っている部分はあるけれども、それぞれのお寺で努力しないと、まずは色々な形で人に来てもらわなければということでもあるのかなと感じますね。

渡邊 最新のデジタル技術を駆使して「自然が自然のままにアートになる」世界をつくりあげるチームラボ (teamLab) も注目すべき活動をおこなっています。アートと宗教が混然一体となっていた古代人が感じたであろう自然に対する畏れとか、人を超えた力を想起させるようなものを体感させてくれます。佐賀県武雄市の御船山楽園で行われる「かみさまがすまう森」は、御船山の山麓の森のなかに巨木や磐座や修験道の修行の場であった場所に彼らのプロジェクションによって人の動きに伴ってインタラクティブに映像も変化していく、人がそこに関わることによって自然も変化する。修行や儀式による心身の変容には長い時間が必要なわけですが、ここでは、さほど長い時間を必要としなくても、人と自然との関わりの原初の体験に近いのではと思えるような感覚を体感することができます。

先ほど名前が出た藤田庄市さんとは、伊勢神宮の第62回式年遷宮の取材を10年間続けて、『伊勢神宮』（新潮社）という写真集にまとまりました。式年遷宮のクライマックスといえる、ご神体を旧殿から新殿に移す「遷御の儀」のときの経験ですが、われわれ報道陣は多くの参列者とともに昼からずっと待たされるんです。日が落ちて暗くなり、空気が涼

しくなってくると、裏の森から風が流れてきて、「キョンッ」という鹿の鳴き声がある。照明がいっせいに消されて、視覚以外の感覚が研ぎ澄まされていく。そこにかすかな提灯の灯りとともに「ザッ、ザッ、ザッ」と玉砂利を踏む足音が遠くから近づいてきて、正殿の中に入っていく。そこでの儀式は肉眼では何も見えません。時折扉を開ける音、かがり火の煙と匂いなど、森の音、空気の変化を感じながら、行列が出てくるのを待つ。鶏鳴三声が唱えられ、ようやくご神体を中心にした列が新殿に向かって、参列者や報道陣の前を進んでいく。暗闇ですから肉眼ではなにかがぼんやりと動いて流れていくとしか見えない。ここぞとばかり、写真もムービーもその模様を、とくにご神体をなんとか撮ろうとするわけです。ご神体は白い絹垣に囲まれています。フラッシュはもちろん赤外線写真も禁止されています。とはいえ高感度フィルムだから、映像自体はそれなりに写っているんです。でも、あどきにその場にいた人たちが放送された映像を見ても、どこか違うと思うでしょう。「見えないもの」をどのように伝えるのか？ 神宮ではそれを「浄闇のなか神気にふれる」と表現してきました。写真や映像では伝わりにくいものをどう伝えるのか？ メディアを通じて宗教を伝えるときの大きな課題がそこだと思えます。「伝える」ことには「報道」と「表現」があります。ニュース報道とともに、宗教の本質にふれることを伝えるには、文学・美術を含むアートによる表現も大事なのではないのでしょうか。情報やデータで埋めつくすのではない、余白から感じることです。

伊勢神宮の取材には、新聞・雑誌・テレビはじめ、著名なカメラマンなど50名近く取材にきていました。しかし藤田さんが宗教を伝えるフォトジャーナリストとして群を抜いているのは、明らかでした。様々な宗教の現場にたちあい、その背景を学び、写真と文章とで表現することができる人はなかなかいません。デジカメの進化で、最近では後からいくらかでも写真を加工するカメラマンがいます。藤田さんはもちろんそういうことはしない。望むべくは藤田さんに続く若い人の登場です。

写真と文章(写真のキャプション)の組み合わせで理解が深まるということでは、写真家の土田ヒロミさんの「ヒロシマ・コレクション」も

多くの人に見てもらいたいですね。原爆の被災地を定期的に定点観測したもので、最初は被爆した107名にインタビューした「ヒロシマ1945～1979」。2回目が「ヒロシマ・モニュメント」という原爆遺跡の風景。3回目は、平和資料館にある被爆者の遺品など。写真一枚ごとにつけられたキャプションとともに写真を見ると、人・風景・ものを「自分事」として感じられてくるんです。これは現在も進行中です。一瞬をきりとる写真を、時間をおいて定点観測することで、時間を表現することに成功しています。

西出 私も藤田さんの『伊勢神宮』の写真がすごく好きです。あとは山ですね、修験。『現代山岳信仰曼荼羅』（天夢人、2020年）はすごい。どういう場なのか、どういう意味があるのかを深く理解して撮影されているので、こちらにも響く。送り手はやはりそこが非常に重要だと思うんですよ¹¹⁾。

ステレオタイプと取材の難しさ

平藤 そろそろ、これからのメディアに求められる宗教リテラシーという感じでお話をしていただければと思います。

西出 今日もっとも私が言いたかったことは、実はこの一年間ぐらいずっと言い続けているのですが、本当に宗教リテラシーが必要なのはマスメディアだ、ということです。メディアには偏見が無自覚にあって、それを修正していくために、リテラシー向上というのは絶対的に必要です。我々の世界は、文章表現で「紋切り型はやめましょう」と強調していて、記事のスタイルブックには問題例も挙げられているのですが、宗教に関してはもう染み付いた紋切り型があって、なかなか修正されない。既存のオールドメディアのなかのステレオタイプを打破していかなければいけない。ジェンダー方面でよくアンコンシャスバイアスという言葉が使われますけど、これが宗教を扱う新聞の態度にも抜きがたくあ

りますね。

宗教リテラシーについて言えば、オウム事件後でやはり大きいのは、1998年にラク（宗教情報リサーチセンター）ができたことの役割と意味だと思います。当初は「官」を主体とする意見もあったけれど、最終的に「民」の運営になった。これまで継続しているのは素晴らしいし、蓄積が進めば、今後さらに価値が増すのではないのでしょうか。ジャーナリズムとアカデミズムの架橋・共働は重要だと思うし、もっとこれを広げていくことが必要なのではないかなと考えています。

渡邊 いま政治でも芸能界でも経済でも、共通して問題にすべきことのひとつは「番記者」的な報道です。ジャニーズ問題でも、私の知る範囲でもいくつかの出版社に「ジャニーズ番」といえる編集者・記者がいました。経済界ではトヨタの「トヨタタイムズ」が典型ですが、メディアの中にも企業べったりの広報記事が目につきます。そして最も問題なのが政治の番記者です。テレビでは、政治ジャーナリストと称する実質は政権・自民党広報者が連日「解説」しています。本来、言葉を大切な情報伝達手段とする彼らの大きな問題は、取材先が都合よく用いる言葉を無批判（あるいは意図的）に使い、拡散していることです。「アベノミクス」などは代表的な例です。先端技術用語についても、開発のスピードが速くて追いついていけないのですが、メディア関係者は、やはり言葉に安易に飛びつかないことが大事でしょう。大切な日本語自体が、政治家によってどれほど汚されていることでしょうか。それも「日本の伝統を大切に」と語る、「自称保守」の人々によって。メディアの人間にとっても、同じことが言えます。

西出 ちょっと話はズレますけど、せっかく持ってきたので。これは2019年1月に統一教会が出したプレスリリースです（机上に示す）。合同結婚式の取材案内ですね。興味深いのはリリースの中に4コマ漫画が付いている点です。会社の上司と部下の会話を主とした漫画ですね。最初のコマで部下から「係長！ 合同結婚式って知ってます？」と問いかけ

があり、次のコマで上司が「90年代に、淳子ちゃんが参加したやつだな」と返答すると、3コマ目で部下が「それが今も毎年やってるようです。ちょっと様変わりして」と言うのと、上司は最後のコマで目を輝かせて「よし、情報を集めてくれ！ワシもついに、独身卒業じゃ!!」と宣言し、部下が「係長、独身でしたね…」と応じるのがオチとなっています。

これはちょうど銃撃の一年半ぐらい前ですね。リリースには「2015年8月26日、文科省の認証によって実現した、教団名称変更を契機として、一般社会との関係性をより円滑なものにしていくために、これまで、教団組織のオープン化や積極的な情報開示に努めてまいりました」とあります。世界平和統一家庭連合に名称も変えてオープンになったから取材しないかという案内ですね。

こういうリリースが来たことに驚きはしましたが、これを見て安直に「あ、そうなんだ、変わったんだ。じゃあ教団の誘いに乗って行くか」という話にはならないだろうと。取材をするのならば、過去の実態を踏まえての取材が当然求められるわけですね。ここではやはり基本的な知識・これまでの歴史を知ることが重要になってくる。発信された情報をマスメディアはどう判断してどう取り扱うか。そしてどういうものを発信していくか。それがとても重要だと思います。

平藤 それは本当に研究者も同じですね。あのひかりの輪に調査に入ると、「こんな人が来ました」というふうにひかりの輪のホームページに載っていく。こちらは「取材できた」「調査できた」という成果として受け止めたいけれど、向こうにしてみれば大学の研究者の調査を受け入れた成果にもなるというお話で。そこは本当にメディアの問題でもあるし、研究者も共有しているところなので、情報交換・共有がすごく重要な部分じゃないですか。

西出 オウムから分かれていった三団体（Aleph・ひかりの輪・「山田らの集団」）で、社会常識に照らせば、ひかりの輪が一番真っ当に見えるということですよ。ただ、平藤さんがおっしゃったように、「こんな

に権威のある研究者が来られた」というような情報の押し出し方をするんですね、ひかりの輪って。それを見ると、私なんかは、取材と報道の在り方はかなり慎重であるべきだろう、とってしまうんですね。彼ら自身が発するその情報をどう見るかとかどう読むかということによって、今後の対応を考えることになってくると思うんです。

平藤 取材って痛し痒しじゃないですか。取材しないと分からないところもあるあたり。

西出 難しいですよ。難しさはイエスの方舟事件（1979～80年）とオウム事件に端的に表れています。この二つの事件は、報道の観点からすれば、表裏ですね。『サンデー毎日』だけはイエスの方舟に犯罪性はなく、オウムは問題があると報道したわけですけど¹²⁾、あの段階でよくきちんと判断できたなと思います。イエスの方舟については、女性たちが家出して集団で変なおじさんの元で暮らしている性的スキャンダルみたいな形で捉えて報道した。しかし、そうではなかった。後知恵だと言われるかもしれないけれど、報道に際しては、やはり、きちんと取材することが最低条件だろうとは思いますが。当該団体だけではなく、周辺の情報収集も大事ですよ。

平藤 そうですね。本当に研究と取材とあまり変わらないところがあって、口コミみたいなことが大事になる。

アナログの復権とデジタルへの展開

平藤 渡邊さん、今後のメディアと宗教の関係について、望ましいありかたや今後の予測はいかがですか？

渡邊 今、Chat-GPTに代表されるAIの活用が全世界的に未来を切り開くイノベーションの鍵だといわれていますが、AIの開発に先だって

人間がAI化していたのだと思っています。すでにある答えに短時間でたどりつく、すでにある情報を整理してまとめる能力、これが日本の学校で勉強ができる秀才や官僚が長けている能力でした。そのための勉強をしてきた。しかし、それはAIに遥かに凌駕されてしまう。大事なものはAIをよき友として付き合う術を学び、AIには不可能で人間にしかできないことを大切にしていくことなのでしょうね。

気になることは、リアルの世界とメタバースのようなバーチャルな世界の共存が当たりまえの世界に生まれ育つ子供たちの思考や感覚がどのようなものになるのかです。SNS内の世界からバーチャル宗教やその神様・教祖が誕生することも十分に予想できます。それがバーチャルとリアルの世界との境界を超えて縦横に行き来する。バーチャルマネーの世界になる可能性も高い。マンガ・アニメ・小説・映像の世界ではすでに描かれているかもしれません。SNSで宗教紛争を煽ることは現実になっています。巨大IT企業の中で着々と準備しているかもしれません。悪事を企てて儲けをたくらむ人たちは、いつの世でも新しい技術に目ざとい。世のため人のため善意で社会貢献を考えていても、それが結果として大きな破局に至ることもあります。うーん。陰謀史観に陥らぬよう、このへんでやめておきます(笑)。

平藤 アナログということ言うと、今レコードを買う人がまた増えてきているし、学生とかでもフィルムカメラを持つようになったという人が出てきたりとかしています。AIとかが出てきてすごくデジタルで行って、それでなくなってしまうのではないかと思われていたものがまた復活してきたりというふうになると、新聞とかもアナログメディアとして復活したりするんですかね。

西出 ちょっとだけデジタルの話をしませぬ。新聞の一覧性について、すごくありがたい言及をいただきましたが、こんな時代になったので、マスメディアはデジタル展開せざるを得ない状況にあります。そのなかでデジタル化の良いところを考えると、我々の世界ってすごく字数制限

が厳しくて、テン・マル一個取って何とか詰めて一行に収めようみたいななかでやっています。しかも字がどんどん大きくなっていて、私が入社したときはだいたい一行15字ぐらいだったのが今は11字ですね。だから新聞メディアの情報が減っているのは間違いありません。

そう考えると、ウェブメディアは多くの情報を入れられるわけです。だから、新聞とデジタルで連動できる、色々な情報を盛り込むことができることで、リテラシーを向上させる力になる。長い文章を書くためには、正確な情報を積み上げて構成していく書き手の力量が必要で、分かりやすいビジュアルも用意してリーダビリティを出していかなきゃいけない。アカデミズムとの連携とか共働がすごく重要になってくるのではないかと思います。

渡邊 アカデミズムとジャーナリズムとの交流はもっと進むといいですね。それと、理系のジャーナリストが待望されています。『宗教と現代がわかる本』で目指したのですが、宗教に関してアカデミズムとジャーナリズム、それにアーティストなども含めた連携、勉強会といった交流の場があるといいですね。編集者やテレビの番組プロデューサー・ディレクター、映画監督や脚本家・マンガ家、ゲーム制作者などが交流し、宗教について自由に話せる場があるといい。それを広げて、海外で仕事をする機会の多いビジネスマンが、日本の宗教や伝統文化を知り、外国人にも説明でき、現実社会を動かしている人へのアプローチも考えていけるといいですね。

テクノロジーの進歩のスピードに社会の対応が追いつかないときだからこそ、理系の科学者・技術者と倫理や宗教・哲学を学ぶ専門家との共同研究が大切になってくるでしょう。価値判断の基準が見えず、結果の勝ち負け、金持ちか貧乏ということでのいいのか、人間にとっての価値の基準をどこに置くのか？ 宗教は大いに貢献できるはずなのですが。

西出 本当にそうだと思います。専門家が発信するサイトやSNSは色々ありますけれど、マスメディアにはマスメディアなりのノウハウや

組織力がありますから、協働していれば面白いと思います。それが宗教リテラシーの向上につながるんじゃないかなと思いますね。

平藤 本日はありがとうございました。

注

- 1) 関連する号として、『現代宗教2008』の特集「メディアが生み出す神々」、および『宗教と現代がわかる本2010』の特集「宗教と映像メディア 映画・テレビ・アニメ・ネットと宗教の関係」も参照されたい。
- 2) 麻原彰晃・中沢新一「オウム真理教教祖が全てを告白「狂気」がなければ宗教じゃない」(『SPA!』1989年12月6日号)。関連する論考として、平野直子「オウム真理教と雑誌報道」(井上順孝責任編集・宗教情報リサーチセンター編『情報時代のオウム真理教』春秋社、2011年)、平野直子・塚田穂高「メディア報道への宗教情報リテラシー—「専門家」が語ったことを手がかりに—」(井上順孝責任編集・宗教情報リサーチセンター編『オウム真理教』を検証する——そのウチとソトの境界線』春秋社、2015年)がある。
- 3) 実際の誌面では、対談冒頭で中沢が示すのは「変な時期」という表現のみで(15頁)、具体的に「例の弁護士さん一家失踪という不可解な事件」について「ほんとうのところをお聞かせ願えませんか」「その点だけハッキリしていないと、どうも腰のすわりが悪い」と問いかけるのは中盤になってからである。麻原の否定に対し中沢が「管理不行き届きだったりして(笑い)」とけしかけると、麻原は「とにかく、内弟子だけで400名ぐらいいますので、信徒さんを合わせると、全部で5,000名から6,000名の方がいらっしやいますから、それはわからないですよ」と言葉を濁しつつも再び「私はありえないと思います」と否定し、中沢は「わかりました。もうこの問題には立ち入りません」と追及を終えた(17~18頁)。
- 4) 『宗教と現代がわかる本』の特集テーマは次の通り。2007「慰霊と追悼 宗教教育 皇位継承 生命倫理」、2008「宗教と医療のあいだ」、2009「天皇と宮中祭祀」、2010「宗教と映像メディア」、2011「信仰と人間の生き方」、2012「大震災後の日本人の生き方」、2013「宗教者ニューウェーブ」、2014「いつか死ぬ、それまで生きる」、2015「マンガと宗教」、2016「聖地・沖繩・戦争」。
- 5) 櫻井義秀「カルト問題と格差社会との関連」(『宗教と現代が分かる本2007』)、中西尋

- 子「韓国に渡った統一教会日本人女性信者の実態」(同 2011)、塚田穂高「日本会議と宗教」(同 2016)、島菌進×中野晃一×天野達志×氏家法雄×栗津賢太「緊急座談会 安全保障法制に反対し、公明党の方針を危惧する創価学会員に聞く」(同 2016) など。
- 6) これまでの報告書は、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の公式サイト (<https://www2.kokugakuin.ac.jp/oardijcc/publications/index.html>) で閲覧可能。
 - 7) 当時の『SPA!』におけるオタク論と宗教の関わりを取り上げた論考として、茂木謙之介「1980-90年代『SPA!』にみる〈オタク論〉と〈宗教〉言説—「宗教とサブカルチャー」論再考のために—」(『文明研究』第36号、2018年)がある。
 - 8) 「こころ」欄での連載をまとめた著作として、菅原伸郎『宗教をどう教えるか』(朝日選書、1999年)がある。
 - 9) このあたりの業界事情は、西出勇志「宗教記者」(『国際宗教研究所ニュースレター』第73号、2012年)で詳しく述べられている。
 - 10) 石井研士「日本人はどれくらい宗教団体を信頼しているのか—宗教団体に関する世論調査から—」(『東洋学術研究』第49巻第2号、2010年)など。
 - 11) このテーマについては、港千尋・平藤喜久子編『〈聖なるもの〉を撮る——宗教学者と写真家による共創と対話』(山川出版社、2023年)も刊行された。
 - 12) 前掲平野直子「オウム真理教と雑誌報道」に詳しい。